WHITE PAPER No.005

日経 225 の値動きを毎日のランキングから読む

2026 年 1 月から 9 月の分析と第 4 四半期への備え

前田 英志 FIN FHI Research Institute
2026 年 10 月 1 日発行 第 3 版
Data Report No.001 解説版

この 9 カ月から分かったこと

株価のランキングで上位によく登場する会社は、下位にもよく登場していました。また、動きの目立つ会社が集まるグループは、目立ち続けても、上位と下位のどちらに多く登場するかは変わりました。よく動くことと、上がり続けることは、分けて考える必要があります。

本書は、日経 225 ランキングのアプリに登録された 225 銘柄を対象に、2026 年 1 月から 9 月の毎日の記録を読み解くものです。株を買った経験や、統計の知識は必要ありません。数字を読むときに、比較の条件を揃える意味から説明します。

観測したのは、株式市場が開いた 180 日間です。毎日、前営業日からの変化率が上位の 10 銘柄と下位の 10 銘柄を記録しました。延べ 3,600 回の登場を、8 つの株価変動グループに分けて調べています。選抜リストの情報は使っていません。

読み終えたあとにできること

「この株は今年強かった」という説明を聞いたとき、いつからの比較なのか、途中でどのように動いたのかを確認できるようになります。第 4 四半期に向けても、上がる株を断言するのではなく、何を記録し、どんな変化を確かめるかを決められます。

本書の数字は、研究レポート第 1 号で固定した分析用データに基づきます。アプリの現在の表示と一部異なる理由は、第 9 章で説明します。

1 起点を変えると株価の物語が変わる

ある株の価格が 100 から 150 に上がり、その後 120 になったとします。100 のときから持っていた人には 20%の上昇です。150 のときに買った人には 20%の下落です。同じ株の、同じ最後の価格でも、どこから見るかによって評価は変わります。

見始めた価格	最後の価格	変化率
100	120	20%上昇
150	120	20%下落

これは計算の間違いではありません。比較している期間が違うのです。「今年は強かった」「最近は弱い」という説明を、そのまま同じ意味で受け取ることはできません。

実際のランキングも入れ替わった

今回の補助分析でも、比較の起点を変えると、累積上昇率の上位 10 銘柄は大きく入れ替わりました。終点を 9 月 17 日に揃えたところ、前年 12 月 30 日からの上位 10 と、3 月 31 日からの上位 10 の共通銘柄は 6 つでした。3 月 31 日からと 6 月 30 日からの上位 10 では、共通する銘柄は 1 つだけでした。

この起点比較は、全銘柄の保存終値が揃う 9 月 17 日までの補助分析です。本書の中心である日々の出現回数は、9 月 30 日までの全 9 カ月を対象にしています。

毎日の観測を積み重ねる理由

そこで、毎日同じ条件で調べます。今日は前の営業日からどれだけ変わったか。その順位が上位 10 に入ったか、下位 10 に入ったか。それを記録して積み重ねる方法を、ここでは「定点観測」と呼びます。

100 から 120 になったという最後の結果だけでは、途中で大きく上がってから戻ったことは見えません。日々の記録を残すと、上位への登場が続いた時期と、下位への登場が増えた時期を分けて読むことができます。

この方法の価値は、結果を見たあとで都合のよい起点を選ぶ余地を減らし、途中で繰り返された現象を確かめられることです。利益を知りたいときには期間全体の収益率も必要です。毎日の順位と最終的な成果は、それぞれ違う問いに答えています。

2 ランキングとグループの読み方

上位と下位は他の銘柄との比較

「銘柄」は、株式を区別する単位です。本書では会社ごとの株式を指します。毎日の終値を前の営業日の終値と比べ、変化率の大きい順に並べます。その上位 10 銘柄が TOP10、下位 10 銘柄が BOTTOM10 です。休場日を挟むときも、直前に市場が開いた日と比べます。

上位は「必ず上昇した」、下位は「必ず下落した」という意味ではありません。全銘柄が上昇した日なら、上昇幅の小さい株も下位に入ります。本書の「上位が多い」「下位が多い」は、周囲と比べた位置についての表現です。

グループは値動きの特徴をまとめた分類

G1 から G8 は、2016 年 7 月 1 日から 2026 年 6 月 30 日までの日別データを使った分類です。前日比がプラスなら 1、それ以外は 0 とする「星取データ」を元に、パターンの似た銘柄をまとめるクラスタリングで分類しました。業種による分類ではありません。下表は構成の例です。

グループ	銘柄数	主な構成業種と銘柄の例
G1	62	機械 化学 自動車など　古河電工 フジクラ
G2	47	食品 医薬品 小売など　武田薬品 JT
G3	22	サービス 電気機器など　SHIFT リクルート
G4	23	電気機器を中心　キオクシア イビデン
G5	21	銀行 保険など　りそな 東京海上
G6	19	商社 非鉄金属など　三井金属 INPEX
G7	17	建設 不動産 電力など　大成建設 東京電力
G8	14	鉄道 小売 空運など　JR 各社 日本航空

グループにまとめると、一社の目立つ動きだけに引っ張られず、どの集まりで上位・下位への登場が増えたかを調べられます。ただし、同じグループの全銘柄が毎日同じように動くことや、違うグループを持てば損失を防げることは、保証されません。

分類方法と対象期間は分類作成者の説明によります。分類には 2026 年 1〜6 月のデータも含むため、この期間の分析は後から分類して振り返ったものです。年初にこの分類で予測できたという意味ではありません。

3 目立つ値動きはどこに集中したか

9 カ月を合計すると、上位・下位への登場は一部のグループに集中しました。特に G4 です。23 銘柄で全 225 銘柄のおよそ 1 割ですが、上位と下位を合わせて 834 回登場しました。全体の 3,600 回のうち、約 23%を占めています。

大きいグループほど回数が多くなりやすい

G1 は 62 銘柄で 926 回登場し、回数では最多でした。しかし、G4 の約 2.7 倍の銘柄を含みます。大きいクラスほど、発言する生徒の延べ人数が多くなりやすいのと同じです。回数だけを見て、G1 の方が目立ちやすいと判断することはできません。

そこで、全体の出現回数を銘柄数に比例して配った場合を基準にします。G4 の基準は 368 回ですが、実際には 834 回でした。つまり、銘柄数から考えた基準の 2.27 倍です。この「出現の多さ」を、全グループで比べたのが下の図です。

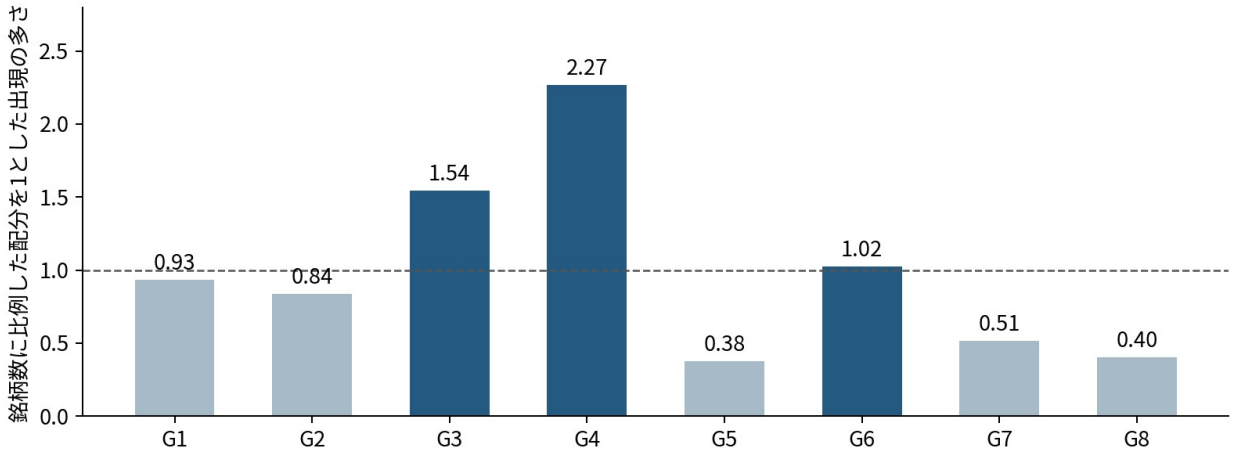


図 1 上位と下位を合わせた出現の多さ。1 は銘柄数に比例した配分。数値は 1〜9 月全体。

G3 も 1.54 倍で、出現が集中していました。G3 と G4 を合わせると 45 銘柄、全体の 20%ですが、上位・下位への登場の約 38%を占めています。人数の違いを考慮しても、動きの目立つ場所に偏りがあったのです。

一方、G5、G7、G8 はランキングの両端に入る頻度が低めでした。ただし、登場が少ないことは安全の証明ではありません。市場全体と一緒に下がれば、ランキングの両端に入らなくても損失は生じます。また、この図は値幅の大きさや将来の利益を表すものではありません。

4 よく登場することと上位に出ることは違う

G4 は 9 カ月全体では上位 469 回、下位 365 回でした。この合計だけを見ると、上位が多いグループです。しかし、3 カ月ごとに分けると、違う姿が現れます。四半期とは、1 年を 3 カ月ずつに区切った期間のことです。

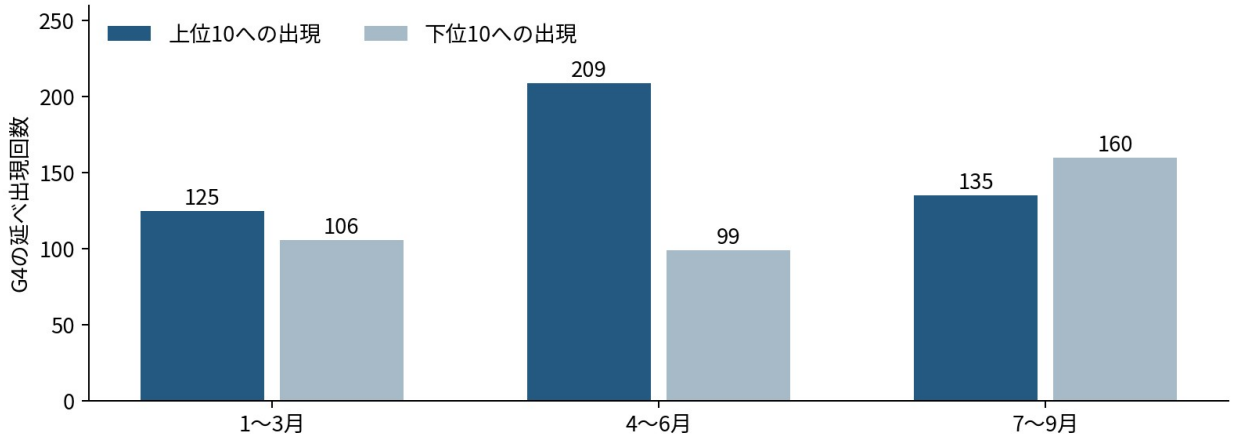


図 2 G4 の四半期別の出現回数。観測日は 1〜3 月 58 日、4〜6 月 61 日、7〜9 月 61 日。

4〜6 月は上位 209 回、下位 99 回で、上位への登場が下位の 2 倍以上でした。ところが 7〜9 月は上位 135 回、下位 160 回となり、下位の方が多くなりました。9 カ月の合計では、この変化が隠れてしまいます。

目立つ場所は残り方向が変わった

上位と下位を合わせると、4〜6 月は 308 回、7〜9 月は 295 回です。大きな差ではありません。銘柄数と日数を考慮した出現の多さも、それぞれ基準の 2.47 倍、2.37 倍でした。G4 はランキングの両端によく現れる特徴を保ちながら、上位寄りから下位寄りへ変わったと読めます。

この区別が、第 4 四半期の準備に役立ちます。今後 G4 の上位登場が増えたとしても、下位登場も多いままなら、目立つ変動は残っています。上位への偏りが戻ったのか、両端に現れる頻度そのものが減ったのかを、別々に確かめる必要があります。

ほかのグループにも違う変化があった

G3 は 1〜3 月に上位 69 回、下位 118 回でしたが、7〜9 月には上位 99 回、下位 85 回に変わりました。G5 も 7〜9 月に上位 33 回、下位 14 回でした。ただし、G5 の合計は 47 回です。G4 の 295 回と比べて観測の数が少なく、上位の比率だけで「次の主役」と決めるには材料が足りません。

5 9月までの流れを月ごとに確かめる

3カ月ごとの集計も、その中の変化をまとめてしまいます。そこで1月から9月までの全月について、特に登場の多かったG3とG4を並べました。表は「上位の回数／下位の回数」です。

月	観測日数	G3 上位／下位	G4 上位／下位
1月	19	18／37	52／44
2月	18	19／45	34／27
3月	21	32／36	39／35
4月	21	29／30	74／28
5月	18	25／30	57／21
6月	22	22／36	78／50
7月	22	41／27	53／81
8月	20	32／20	36／44
9月	19	26／38	46／35

G4は夏に下位が増え9月には上位が多くなった

G4は4月、5月、6月に上位の方が多く登場しました。7月は上位53回、下位81回、8月も上位36回、下位44回です。ところが9月は上位46回、下位35回になりました。7〜9月全体は下位が多くても、その最後の月は上位が多かったのです。

したがって「第3四半期は下位が多かった」という事実と、「9月は上位が多かった」という事実を、両方持って第4四半期に進む必要があります。9月の変化が続くかどうかは、まだ分かりません。

G3は第3四半期全体と9月で方向が違う

G3は7月に41回／27回、8月に32回／20回と上位が多くなりました。しかし9月は26回／38回で、下位が多くなっています。第3四半期全体の改善だけを見て、流れが続いていると判断することはできません。

なお、月によって市場が開いた日数は違います。6月や7月は22日、9月は19日でした。月をまたいで出現量を比べるときは、回数だけでなく1営業日当たりの回数も確かめます。同じ月の上位と下位の比較では、観測日数は共通です。

6 個別の会社にも両側への登場が見られた

グループの特徴は、個別の会社を見ても確認できます。次の 5 銘柄は、9 カ月全体で上位・下位を合わせた登場が多かった銘柄です。推奨銘柄や選抜リストではなく、今回の分析で得られた出現回数の例です。

銘柄	上位の回数	下位の回数	合計
キオクシア	60	39	99
イビデン	49	40	89
古河電工	45	32	77
フジクラ	39	32	71
太陽誘電	39	31	70

キオクシアは 180 日のうち 99 日、上位か下位のどちらかに登場しました。上位 60 回だけを見ると、強さが続いたように感じるかもしれません。しかし、下位にも 39 回登場しています。イビデンも上位 49 回、下位 40 回です。上位への登場が多い株を、そのまま安心して持てる株と読み替えることはできません。

繰り返されやすかったのは方向よりも登場の多さ

全 225 銘柄について、3 カ月ごとの「上位と下位を合わせた登場の多さ」を比べると、よく登場した銘柄は次の 3 カ月にも登場が多い傾向がありました。一方、「上位の回数から下位の回数を引いた差」には、同じような持続性が見られませんでした。

専門的な比較方法は研究レポートに譲りますが、読み取れることは明確です。目立つ値動きが起きやすい場所を過去から探すことと、次にどちらの方向へ動くかを当てることは、別の難しさを持っています。

一社だけが結果を作っていないかも確認した

G4 で最も登場が多いキオクシアの寄与を集計から差し引いても、残りの G4 の出現の多さは、銘柄数に応じた基準の約 2.08 倍でした。また、上位・下位を各 10 銘柄ではなく各 5 銘柄に狭めても、G4 と G3 への集中は残りました。

これは、特定の一社や「10 位まで」という区切りだけで主要な結果が生じたわけではない、という確認です。ただし、一社を除いて毎日の順位を最初から作り直した分析ではありません。将来にも同じ集中が続くことを保証する結果でもありません。

7 第 4 四半期には何を確かめるか

1〜9 月は、すでに結果を知っている期間です。その特徴を説明できても、まだ見ていない期間に通用するかは別問題です。10〜12 月の第 4 四半期を、今回の見方を確かめる最初の期間にします。ここでの準備とは、結論を先に決めず、確かめる問いを先に決めることです。

G4 では集中と方向を分けて見る

G4 は、銘柄数を考慮しても上位・下位に多く登場し続けるでしょうか。そして 9 月に見られた上位の多さは続くでしょうか。この 2 つを別々に記録します。集中が続いて方向だけが変わるのか、登場する頻度そのものが変わるのかを確かめます。

G3 では改善が続くかを月ごとに見る

G3 は 7〜8 月に上位が多く、9 月には下位が多くなりました。10 月、11 月、12 月で上位の多さが続くのか、再び入れ替わるのかを見ます。四半期の合計だけで途中の変化を消さないことが大切です。

G5 と G7 では回数と広がりを見る

G5 の上位への偏りが続いたとしても、少数の登場に基づく比率なのか、複数の銘柄に広がる変化なのかを確認します。G7 は 1〜9 月全体で上位 48 回、下位 92 回でした。下位の方が多い状態が弱まるかを、引き続き観測します。

記録する時期	確かめる数字
毎営業日	同じ対象とルールで上位 10 と下位 10 を保存
週ごと	直近 20 営業日の登場の多さと上位・下位の差
各月末	月内の日数を考慮し 登場した銘柄の広がりも確認
12 月末	第 4 四半期全体をまとめ 事前の問いに答える

20 営業日という同じ長さで比べれば、月による営業日数の違いを減らせます。途中で目立つ結果が出ても、その結果に合わせて対象銘柄や区切り方を変えないようにします。変更が必要なら、変更前と後を区別して記録します。

これらは売買を自動的に決めるルールではありません。毎日のランキングで確認した特徴が、実際の収益や損失とどう結びつくかは、次の研究で確かめる課題です。

8 この分析で分かることと残る課題

順位だけでは利益や値幅は分からない

上位 10 に 1 回入ったという記録は、少し上がった日も大きく上がった日も同じ 1 回です。11 位との差がごく小さくても、10 位は数え、11 位は数えません。配当も、この前営業日比には含めていません。投資の成果を評価するには、値幅や配当を含む収益、途中の損失も調べる必要があります。

また、毎日同じ条件で観測しても、どの期間をまとめるかで結果は変わります。本書が 9 カ月全体、3 カ月ごと、各月を併記したのは、その違いを読者が確かめられるようにするためです。定点観測も、期間の選び方から完全に自由になる方法ではありません。

過去を把握することと未来を断定すること

今回確認したのは、過去 9 カ月で観測された特徴です。どんなニュースが原因だったか、同じ変化が次にいつ起きるか、どの株を買えば利益になるかまでは確定していません。方向が変わったことを、企業の将来性が変わった証拠と読み替えることもできません。

それでも、途中に何が起きたかを丁寧に把握する価値はあります。「強い」「弱い」という印象を、何日、何回、どの比較条件でそう見えたのかに置き換えられるからです。結論が外れたときも、観測そのものが違ったのか、観測からの解釈が違ったのかを考え直せます。

本書から持ち帰っていただきたい見方

株価の説明を読むときは、最初に比較の起点と期間を確かめてください。次に、途中で上位と下位の双方に登場していなかったかを見てください。グループを比べるときは、含まれる銘柄数や市場が開いた日数を揃えて考えてください。

そして、よく登場する場所が続いても、上位への偏りが続くとは限らないことを覚えておいてください。1〜9 月の分析から第 4 四半期へ持ち越すのは、上昇の断言ではなく、同じ条件で確かめる問いです。

9 データの注意点と詳しく読むための資料

数字を固定した理由

アプリの数字は、価格データの訂正などで過去分も変わることがあります。研究では、どの数字から結論を出したかを追えるよう、分析に使った記録を固定しました。本書は、その研究用データを読みやすく説明しています。

1月5日から9月17日までの174日は、保存されていた終値から毎日の順位を計算しました。9月後半の残る6営業日は、日別表示の上位10と下位10を接続しました。出現回数の分析は9月30日まで含みますが、全225銘柄の保存終値を使う補助分析は9月17日までに限定しています。

10月1日朝のアプリの累積集計と比べると、9銘柄の出現回数に差がありました。上位・下位それぞれの回数の絶対差を足すと10です。延べ3,600回に対して約0.28%ですが、これはデータ全体の誤り率を測った数字ではありません。主要なグループへの集中という結果は、この差を考慮しても変わりませんでした。

価格の接続を疑う異常値も確認したため、研究レポートでは根拠と扱いを開示しています。9月25日は比較可能銘柄数が224と表示されており、特定できていない1銘柄の欠損があります。銘柄数による比較への影響を調べたところ、主要な結果の桁や順位は変わりませんでした。全価格を別の供給元と照合したわけではなく、追加の検証は必要です。

対象225銘柄とG1〜G8の分類は、今回の分析では固定しました。各日の正式な日経平均の構成銘柄を過去にさかのぼって再現した分析ではありません。第4四半期に対象や分類を変える場合も、変更による差と値動きによる差を区別する必要があります。

分析の根拠と詳しい方法

FIN FHI Research Institute Data Report No.001

日経225の極端変動と株価変動グループ

2026年1月から9月の観測と第4四半期の検証課題

前田英志 2026年10月1日 第2版

グループ別集計、統計的な確認、全225銘柄の出現表、データの差異を掲載。補足データには再集計用の記録とコードを収録。

原データの参照先

日経225 TOP/BOTTOM分析

https://nikkei-225-ranking.hideshi588113.chatgpt.site/

株価変動グループは「秘伝の書_20260719版.xlsm」2026年シートR列を使用。選抜リストと選抜フラグは使用していません。